

うくゆつじとら林とほりてはくはるあ久ととほり
と作はる物いり教一突とら

八旬有餘宗長

あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は

富士歴覽記

入道中納言雅康

明應八年五月三日富士歴覽所を先皇御在所に立
侍りて江州柏木に小をゆりて四日北湖よりきり
侍りに社頭をあらはせりてまじりて

あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は

肉白川外白川さこのふりぬまにまてて人くわたり
かひゆせは心ゆらに祈念ゆま

あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は

山中とやおもてかこすをさう徳

あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は
あはれにわが宗長は

関民部大輔威直在而少つとして先立而乃寺母を懐け
 たり今更きりやめれまゝに後夜ありとてくさ
 ゆるき
 初めと思ひさうやまほひあをれ花をう
 七日雨小もして逗苗くゆるしに民部大輔のむとよ
 うしてゆるき
 りみやみとを公うり花を母の里に育ちり
 花の遠く
 四月あはれあひけまのやうにまのしりく
 八日高所は後つとして哥まのり張行くゆるしに十

題はとくりて初春

十六道をせく世を渡つまをさふはよてまをり
 柳風
 これあはれあひけまのやうにまのしりく

秋田

とあはれやあひけまのやうにまのしりく

達意

橋乃こけらとあひけまのやうにまのしりく

松

名山あはれあひけまのやうにまのしりく

けふ所の見山といふ也十二日國府依渡入道誠恭上取よ
ゆよりてあそまのり一途乃中下

郭公

あこいささるあ甲小がふはつさきと誰かたふお

納涼

お公あくお思井たふりあはせおいひいふんかあふ

恨意

いはれまふとあぬあを恨しむさのりあのもいあふ

十六日太神宮代官の人をみいふとけりりあふ
きくゆつりまは

お十路川あつりあは海ふかぬよなをる

十七日尾州大野日志ゆりに伊豆志早雲菴あも

よりる書とをなあ一見乃次下後及今川宿

所にあつりよるさけさる國もてあかきう字記の

まゆり来年小延川とあふようちとせゆりよ

りやあもまは作ゆとともろ省あふるゆりゆり

まきささる一辺化乃席にのみてつりきり

今やうあすかの海志をうらふ人ふうあふあま

十八日らさ那郡緒川水聖若清の史為則り上取りる

ゆりまうは處よまきりく休是とあふりり一熱切日

中けとち心ふつふと雨粒くゆる数日の夏移へ
乃奥遊あり女首ほらぬ青小山霞

旅

まにわあつと人の上をさふふの心あせしん
いふ伊くうまふ瓜うり史書いのかされおとほ
祝

きくくもむら物れまらほらぬあすふ校をかなう
今ふかり切立候ゆるま又者二首れうよゆ

夏月

胡ほり花を月を成くうまに感うり地及たあ月

祝言

松のえよはてふこの伊久流ひ玉のと同末ふ
十九日八はしをえに人くこういまかしてゆるさ
とよひくまかきれとあくあれそく果さけくこと
も心うつくしくみゆるすうりせなるもれいよれ
かほりさう神さやあぬかうとをさへんみまもて
あこわに思ひまきやけつと七十九地敷をま
杜若みまらあてしうとあつとあふらばもは
大目とらより舟もあ三行へ行ゆる風うりて
くもゆるゆるいあれあよてあほらみま

つせおれ人老もさぶつりいける

君はつらう。おれがたもと袖ぬせおとあいにまじあぬ

えく後日おみくことせゆ

えんはうにふもぬあ神を誰めかろく

大演といふあ人から舞てあふ堂舎日ちうくを

みくいさるり御前よりく

あふもれ波らけきさひ日おのきよあをせ

こよいを船中りてあくゆりてあつよ船もも松の

ばりう魚りーゆせハゆりてはきゆる

難波江をゆぬあ海もあありのありうさく

おみ目又佐久嶋さりよあ人舟りあて八徳着とくよ小唐

もやうりてみるりりふあはさるくあれさう

海より山乃井の神もさるく

おれも世もあはれさるくあはれさるく

お八日おはつて侍あよ右あさふあてき

あうとつあをみせはさるくあはれさるく

あはれさるく

昔さるくあはれさるくあはれさるく

潮頃風日なりのあはれさるくあはれさるく

あはれさるくあはれさるく

今こそとてつらきに侍らやほろめとて申せむなり
六月一日の橋のさくらをくらぬるより二村山の上と
とていふまげのまじりてあやにきくことよめり
ふとたりてつらきなり

とていふ遠江のまじりてあやにきくことよめり
法華堂に一言のゆり堂のまじりてあやにきくことよめり
ゆりていふことよめり

二日寺のまじりてあやにきくことよめり
かとていふことよめり

引馬乃岩小つていふことよめり
八日と申れ申小つていふことよめり
かとていふことよめり

日乃坂をいふことよめり
かとていふことよめり
古今集に入ゆことよめり

かくやあまのうらみぬまをよりにとさひねえのさねの中山
九日と夜の中もてあまの一見れれども雲乃かま
ふりこけえしゆらねとけはま成よけく一日を海り
をれ方十首録ゆら

大かこいさしつるものさけしうきなりもさねあけさひ
をれ方十首録ゆら
あまのうらみぬまをよりにとさひねえのさねの中山
九日と夜の中もてあまの一見れれども雲乃かま
ふりこけえしゆらねとけはま成よけく一日を海り
をれ方十首録ゆら
あまのうらみぬまをよりにとさひねえのさねの中山
九日と夜の中もてあまの一見れれども雲乃かま
ふりこけえしゆらねとけはま成よけく一日を海り
をれ方十首録ゆら

たか

きやくしゆとまこいあめのもさひ思ふ井あ乃中山
郭ふゆの中山なるそらりおよふなもあまのうらみ
定りてとらねる雷とともひむせをぬすりてあまの白雲
あまのうらみぬまをよりにとさひねえのさねの中山
九日と夜の中もてあまの一見れれども雲乃かま
ふりこけえしゆらねとけはま成よけく一日を海り
をれ方十首録ゆら
あまのうらみぬまをよりにとさひねえのさねの中山
九日と夜の中もてあまの一見れれども雲乃かま
ふりこけえしゆらねとけはま成よけく一日を海り
をれ方十首録ゆら
あまのうらみぬまをよりにとさひねえのさねの中山
九日と夜の中もてあまの一見れれども雲乃かま
ふりこけえしゆらねとけはま成よけく一日を海り
をれ方十首録ゆら

へんじし誰志のまゝに御人の御志をまゝにまゝに
 やうにめとて成をりてやると
 十七日又この日右衛門守高市止宿のりやうとありて
 乃うくこもを侍せとて教日新きうくひと^{丁敬之田イ}らうと
 八日蹴鞠あつて逗留のりてて稽樂と下種くれ真地
 ゆうと廿二日二首の懐紙をてまかしてて披露之

朝輝

旅もていとしひもあり高くとほりてあけとくまゐん

忠志

道のこと相傳へし昔くはるまじと志しゆふまはくは
 七月初日園氏部を又高市あく人々類とてくまて

七夕枕

惜月

なをせぬれ人をもかたきあそとててくま月あけ

寄藤吉

我命きこすありと何き藤吉と仰ぐ藤吉

述懐

ふりかふの道しへありて故身もせらるれり
すこ部小中納言入道宗世にありて死する所を
いとゆりくきこくかく侍従大納言實隆卿より
くはせ計る

あえまじいふ忠告のりあるきとむらじも
述

今を悔い愛はうりなるありてはうらまはせはれり哉



これむじう景祖雅經卿ゆいゆるねえくらあゆり
しに宗洋の山もて路引昔く愛うののあへ
もなぬつる下きとらありて又雅世卿のの
と成りゆりしに雅經の守とありてゆりて
しききむしとしりしはのさしてせきも若は
下りせはらね侍もあへんはき足きりもらにまも
こよ免はなる人し
宗祇法郎まらりるまらりあまのよむまらりまら
了ん送りゆれとくよみてつりしき

未だ成くまらわやう思ひやうあまのよむまらりまら

三井寺にありては
 寺の御所にありては
 寺の御所にありては
 寺の御所にありては
 寺の御所にありては
 寺の御所にありては
 寺の御所にありては
 寺の御所にありては
 寺の御所にありては
 寺の御所にありては



羣書類從卷第三百二十五

七

